

“新しいカタチの助産所”をめざして、開業準備のために精力的に活動している溝江好恵さんから、「りれー」のバトンをうけて、多少はとまどいながら、開業して8か月目の日頃感じていることを書いてみたいと思います。

訪 問

「おはようございます。助産婦の松江で一す。」
出生通知書を見ながら各家庭に電話して、翌日の訪問を約束。ほとんどの産婦さんたちは、歓迎して待っていてくれます。

今年4月から、青森保健所の委託を受けた訪問指導員として、妊産婦と新生児の家庭訪問をすることになり、市内地図を見ながら、「赤ちゃんとお母さんはどうしているかな?」と思い、を馳せつつ、電話をします。

家庭訪問してみますと、赤ちゃんとお母さんの環境が一目瞭然。赤ちゃんが中心におかれて家族の愛が溢れているのを見ると、本当に良かったな、と心から喜びを感じます。しかし、赤ちゃんが歓迎されている所ばかりではなく、病院で働いていたときに想像した以上に問題を感じる時もありました。

保健所の依頼だけでなく、友人の紹介や他の医療機関からの紹介でも、家庭訪問することがあります。なかには、孤独と向き合っている母親もいます。そんなとき、「もし私が訪ねていなかったら……」と感じ、会えて良かったとつくづく思うのです。

こんなことがありました。開業して4か月たったころ小児科に勤務している友人から紹介があり、哺乳力微弱で入院していた赤ちゃんの母親が、育児不安で心配だから相談にのってほしいとのこと。早速、助産院に来てもらい、いろいろ話を聞きながら、育児指導、授乳指導をしました。

その方は実家で産後を過ごしてはいるのです

りれー随筆 ⑦④

まつえ助産院(青森県青森市)

松江喜美代

が、実母は悪性腫瘍で入院中、実父も骨折で入院中、独身の兄弟と暮らしていて、9歳も若い夫とは別居中、いずれは離婚するだろうと本人は言い、実家も居づらい様子です。

育児不安が募り、ミルクの飲ませ過ぎからくる嘔吐、母乳を飲ませられない、赤ちゃんが泣きやまない、などの問題が起きていました。約2週間かかわる中で、精神的に落ち着きを取り戻し、固かった表情に笑顔が浮かび、赤ちゃんを見る目に、愛情が感じられるようになってきました。なんとか母乳栄養が確立し、ミルク代がかからなくなるところまでできたときには、本当に心から良かったと思ったのです。

しわ寄せを受ける人々

私は、去年の6月まで総合病院の1スタッフとして、22年間勤務しました。最初は看護婦として小児科病棟、婦人科病棟で6年間勤務していましたが、小児と母性にかかわる中で一念発起、助産婦学校へ進学、その後、16年間産科病棟で働いてきました。

その間、社会情勢は大きく変化しました。赤ちゃんとお母さんの看護に明け暮れる中で、赤ちゃんとお母さんの置かれている環境が、その影響をものに受けていることを痛感していました。

念願の 開業助産婦として

● 女性の社会進出、核家族化、社会生活での人間どうしのつながりが希薄になってきていることなどを背景に、子捨て、子殺し、母親のマタニティ・ブルー、育児ノイローゼ、果ては母子心中など、枚挙にいとまがないほど、マスコミを賑わしています。いわゆる社会の歪みが、弱い所にしわ寄せして来るのは、当たり前になってきています。

次代を担う子供たちが、健全な社会で育たないと、次代を健全な社会につくれるとは保証できません。

● 今、社会では老人福祉の問題が大きく取り上げられていますが、老人福祉を支えるのも、今の子供たちです。その子供たちを育てる母親が、幸せな状況でないとき、子供たちがその影響を受けないわけはありません。

卵が先か、鶏が先かの問題ではありませんが、気がついた所から、手を付けていく必要性を感じたのです。

地域のエキスパートとして

昔から、開業助産婦さんたちは町の中や村の中で、地域のエキスパートとして、大きな役割を果たしてきたと思います。

年々少なくなっていく開業助産婦さんたちの末端に加えてもらって、分娩こそ手がけません

が、母乳育児を中心に、育児コンサルタント的な立場で、若い母親たちの助けになれば、と考えて病院を飛び出しました。

当地青森は、経済的基盤も薄く、所得も全国的平均をはるかに下回り、それに伴って母子保健の水準も、全国下位の域から出られません。乳児死亡率も、周産期死亡率も、全国統計が発表されるたびに、母子保健の仕事にかかわっている人達を落胆させているのです。

そんな中で自分が果せること、それは、地域の開業助産婦として、先輩方の後を追いつながら、一人でも困っている赤ちゃんや若い母親の手助けをしていくことだと考えているのです。

今まで助産院に来てくれた若い母親たちに呼びかけて、交流サークルを作って4か月が経ちました。1回目は私の呼びかけで始まったのですが、「堂々と赤ちゃんづれで遊びに行ける所がない」「一人で悩むより、同じ育児のことで話せる友達が欲しい」「月1回はみんなで集まっておしゃべりしたい」等々、要望が一杯出てきました。

私の名前をとって“まっちゃんクラブ”と名付けられ、会費も集め、年に一度は夫も入れて、などと、計画も母親たちが自主的に立てはじめ、その集いを楽しみにしているようです。

開業してからまだ日が浅く、基盤もこれからの助産院ですが、いずれは母親予備軍の中・高校生とかかわる機会も作り、末端から地域の母子保健に関与していきたいと考えています。

* * *

前号の溝江さんの書かれた、「もう一つの思い」は、伝わりましたでしょうか。次号は、弘前大学医学部付属助産婦学校で同期の、宮本昭子さんにバトンタッチしたいと思います。彼女は、短大専攻科となった母校で、助産婦学生の教育に携わっています。

よろしく、みやさん。